

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	辰野 浩美
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 山崎 勝之 副主査：（岡山大学教授） 安藤 美華 代 委員：（兵庫教育大学教授） 西岡 伸紀 委員：（鳴門教育大学教授） 吉本 佐雅子 委員：（鳴門教育大学教授） 皆川 直凡
3. 論文題目 児童期における正負感情の経験と感情表出性が心身の健康に及ぼす影響	
4. 審査結果の要旨  論文提出による学位申請者 辰野 浩美 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。  論文審査日時：平成26年7月6日（日） 13時30分～14時30分 場所：鳴門教育大学 人文棟6階 A3会議室  1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す、4部、全12章から構成されている。  第Ⅰ部 子どもにおける感情表出性と心身の健康問題 第1章 感情の様々な側面 第2章 感情表出性と心身の健康問題 第3章 正負感情経験と心身の健康問題 第4章 本研究の目的と概要 第Ⅱ部 感情表出性尺度 教師評定版と自己評定版の作成 第5章 感情表出性尺度 教師評定版の作成（研究1，2） 第6章 感情表出性尺度 自己評定版の作成（研究3，4） 第Ⅲ部 感情表出性および正負感情経験と健康・適応の関連 第7章 教師評定による感情表出性および正負感情経験と健康・適応の関連 横断的研究（研究5） 第8章 自己評定による感情表出性および正負感情と健康・適応の関連 横断的研究	

(研究6)

第9章 中間考察

第10章 感情表出性および正負感情経験と健康・適応の関連 予測的研究(研究7)

第IV部 小学生の感情と健康・適応の関連についての成果と課題,そして今後の予防教育への適用の可能性

第11章 本研究の成果と課題

第12章 結論ならびに要約

概要は以下の通りである。

小学校中・高学年において、感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響を明らかにすることを目的として、以下のような4部構成で研究を行った。

第I部では、小学生における感情制御と心身の健康問題に関連する心理的特性に関して概観し、予防教育の必要性について言及した。まず、小・中・高等学校における心身の健康にかかわる問題行動の動向を指摘した。そして、子どもの問題行動の予防及び健康促進の要因として感情制御に焦点をあて、小学校中・高学年に起こりやすい発達の变化もふまえて一次予防の重要性を述べた。次に、感情制御のプロセスより、感情表出性と正負感情経験を重要な要素として着目し、感情表出性および正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響について、先行研究の結果を概観した。その結果、感情表出性および正負感情経験それぞれの影響については明らかになっているものの、感情表出性と正負感情経験の交互作用効果についてはあまり研究が行われていないことが明らかになった。また、日本においては感情表出性を測定する一般化された尺度もなく、そのため子どもを対象にした感情表出性と健康・適応の関連を明らかにした実証的研究が十分に行われていないことも明らかになった。これらのことから、続く一連の研究では、小学校中・高学年を対象にした感情表出性を測定する尺度を作成し、感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響についての基礎的知見を明らかにし、健康・適応を増進する一次予防プログラムへの示唆を得ることを目的として研究を行った。

第II部では、感情表出性を測定する尺度を作成する研究として以下の4つの研究を行った。研究1・2において感情表出性測定尺度の教師評定版を作成し、研究3・4では感情表出性自己評定尺度を作成した。作成の結果、さらに精度を高める必要性はあるものの、いずれも信頼性と妥当性が示され、感情表出性の標準化された測定尺度が作成された。

第III部では、感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響について検討する研究を行った。研究5において、教師評定における感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響を明らかにするために横断研究を行った。その結果、階層的重回帰分析において、感情表出性の主効果として、4・5年生における身体的反応、不機嫌・怒り感情、学校生活享受感情に有意な正の係数がみられた。また、感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が、4年生の無気力において認められた。

さらに研究 6 において、自己評定における感情表出性と正負感情経験が健康・適応に及ぼす影響を明らかにするために横断研究を行った。その結果、感情表出性の主効果として、全体および 6 年生における不機嫌・怒り感情と無気力において有意な正の係数が見られた。また感情表出性と正感情経験の有意な交互作用が、全体の無気力ならびに女兒の学校生活享受感情において認められた。また感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が、5 年生の抑うつ・不安感情と全体の身体的反応において認められた。

研究 5 と研究 6 の結果の比較、つまり感情表出性の評定者の違いによる結果の比較を行うと、教師評定による評定の場合は 4, 5 年生において有意な主効果が数多く認められ、自己評定の場合は 6 年生において有意な主効果が数多く認められていた。

最後に、研究 7 で感情表出性および正負感情経験と健康・適応の関連について予測的研究を行った。その結果、感情表出性は、教師評定、自己評定ともに、1~2 か月を経た Time1 から Time2 への健康・適応変数の変化を予測できなかった。一方、教師評定において、感情表出性と正負感情経験の交互作用における結果として、Time1 の感情表出性と正感情経験の有意な交互作用が 4 年生の抑うつ・不安感情において認められた。また、Time1 の感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が全体の身体的反応において認められ、さらには、Time1 の正負感情経験の有意な交互作用が全体の身体的反応において認められた。

また自己評定では、感情表出性と正負感情経験の交互作用における結果として、Time1 の感情表出性と正感情経験の有意な交互作用が、全体の抑うつ・不安感情、全体の不機嫌・怒り感情、5 年生の無気力、全体の学校生活享受感情、男児の学校生活享受感情において認められた。さらに Time1 の感情表出性と負感情経験の有意な交互作用が 6 年生の無気力と全体の身体的反応において認められた。加えて正感情経験と負感情経験の有意な交互作用が全体の無気力と女兒の無気力において認められた。

以上のような感情変数と健康・適応変数の関連から、感情表出のみを高めるとストレス反応を悪化させるが、負感情経験が高い場合には感情表出を高めることがストレス反応低減につながることで、負感情経験が高い場合には正感情経験を高めることが健康・適応を高めること、正感情経験を高めることは健康・適応を高めるが、その際感情表出性を高めると健康・適応の低減につながることを示唆された。

第 IV 部では、本論文の最終章として、本研究の課題ならびに今後の予防教育への適用の可能性について考察された。まず感情表出性測定尺度の精度を高める必要性や予測的研究における手法の改善を検討していくことの必要性が考察された。そして今後の予防教育への適用の可能性として、学校で多くの子どもを対象におこなう一次予防教育プログラムを行なう際の感情表出性測定尺度の活用、評定者の異なる感情表出性尺度の活用による教師と子ども双方での結果の共有が指摘された。さらには、感情経験と感情表出性の交互作用の効果の存在が明らかになったことから、この交互作用の現象を考慮に入れ、従来の感情変数の操作を中心に展開される心身健康・適応への予防・介入の方法を再構築する必要性が示唆された。

## 2. 審査経過

本論文では、特性的感情表出性にかかわる教師評定と児童評定用の新たな尺度を信頼性と妥当性を高め確認しながら作成し、正負感情経験と感情表出性の主効果ならびに交互作用効果を考慮した上で健康変数への影響を検討した。さらには、その健康への影響を横断的研究から予測的研究へと精度の高い研究が展開されていた。特に、作成された尺度の適用の精度の高さならびに教師と児童自身の両情報源の活用、感情表出性と経験の健康変数への交互作用効果への着目、そして横断的研究と予測的研究の比較への展開が高く評価された。

尺度作成では、教師という他者からの評価と児童自身による評価の2つの側面から特性感情表出性の情報が得られるという情報収集の多面性が確保され、また各尺度の標準化の度合いが高い尺度作成へと細心の注意が払われていた。とりわけ、尺度作成では重要になる妥当性の検討には多面的なアプローチが行われた。このことから、これまで児童の自己評価に頼ることが多かった知見を教師による評価という他者からの知見と比較検討することが可能となり、他者と自己の両方向からの評価結果の検討が可能となった。その結果、他者と自己の評価と健康との関連について評価源により異なる、新たな知見を多数提起することができた。この情報源の違いによる健康への関連内容の相違についての知見は貴重で、異質な情報源からの評価結果の活用の必要性を強く示唆する結果となった。

また、健康との関連ではこれまで横断的研究方法が用いられることが多い実状にあったが、比較的实施が困難な予測的研究方法も加えて目的変数となる健康変数の初期値の統制（時間的変化値への変換）を可能にした階層的重回帰分析方法が適用され、因果推定レベルの高い研究による知見の提供となった。そしてこの知見から、感情経験と感情表出性の主効果ならびに交互作用効果の観点から心身の健康を維持、向上させる学校での予防教育への開発に多くの示唆を提起することができた。とりわけ、両独立変数の交互作用効果の存在は重要で、学校予防教育におけるこれらの変数の操作と評価に新たな視点をもたらしたと言える。

今後の課題としては、①特性的感情表出性尺度の信頼性と妥当性面のさらなる精度の向上、②予測的研究における時期ならびに時間間隔等の研究計画上の方法の改善、③健康変数の測定方法の改善と拡張、④学校での予防教育への実際の適用に至るさらなる知見の導出などが指摘された。

こうして、精度が高く情報収集源の多様な尺度作成から因果関係推定の精度を上げた研究の展開へと至り、そこで得られた知見は心身の健康面にかかわる学校教育の向上に直結する内容を有し、科学的根拠をもった学校予防教育に大きく貢献できるものと判断された。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 辰野 浩美 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。